

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On Luzi's "Yishi"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1991-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2266

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



盧子『逸史』考

中 島 長 文

- 一、『逸史』論——その思想と性格（『神外大論叢』第四二卷第三号）
- 二、著録
- 三、『逸史』と『史録』
- 四、『逸史』と雲笈七籤本『神仙感遇伝』
- 五、現行諸本
- 六、著者

二、著録

『逸史』を最初に著録したのは、慶曆元年（一〇四一）に成った宋の内閣文庫ともいうべき崇文院の書目である。『崇文院總目』史部雜史類には「逸史三卷大中時人撰」とある。次いで、それより二十年ほど遅れた嘉裕五年（一〇六〇）の『新唐志』子部小説家類に「盧子史録卷七、又逸史三卷大中時人」と著録する。南宋の鄭樵『通志略』は史部雜史類に「逸史三卷大中時人所作」（卷四）、『遂書堂書目』小説類「盧子逸史」（この書目は例として巻数を示さない）、そして『玉海』卷四十七には唐代の逸史として、『新唐志』小説家の「高彦休闕史三卷。盧子史録卷七、又逸史三卷大中時人。李隱大唐奇事記十卷」、雜史類の「杜信史略三十卷」、『崇文目』雜史類の「唐補紀三卷」を引く。宋代を通じて各書目には小説と

雑史との分類のちがいはあれ、いずれも作者を「大中時人」とするだけで名を挙げない。そしておおむね「三卷」である。宋一代はほぼこの三卷本が伝えられたと思われるが、元代に入ると『宋志』に見られるように「盧氏逸史一卷……並不知名。」となつて一巻本が現われる。そしてそれ以後の書目からは姿を消す。ただしそのことによつて三卷本が減びたとはそのままでは言えない。というのは元末明初の陶宗儀が編纂した『說郭』（所謂明抄本）には『逸史』に「三卷」と注するからである。この注は『說郭』引用の他の書の例からみて陶宗儀の原注と考えられるから、かれは三卷本によつて『說郭』に摘録したわけである。しかしこの後は、一般的に言つて輯佚書の仕事も盛んに行なわれ、私家書目も多く出るようになったにもかかわらず、『逸史』の名はどの叢書、どの書目にも見当らない。おそらく明一代を通じて淘汰の列に入ったのだろう。一度も刊本にならなかつたことも消滅を速めた理由の一つであろう。ただ清初の褚人穫に『逸史』の存在をいう「隋唐演義序」がある。（輯校盧子『逸史』卷末附録二参照）魯迅が『中国小説史略』第十四篇で指摘する袁篋庵（韞玉）所藏本である。そこには隋の煬帝と朱貴兒の組合せが玄宗と楊貴妃になつたという再世縁の話が載つていたという。この話は『広記』には採られておらず、その他の数少い佚文にも見えない。わたしのこの作業もそもそもはこの話を捜すことから始つたのだが。もし事実だとすると、宋元の三卷本ないし一巻本の系統のテキストが明末清初まで残つていたことになる。だが残念ながらいまではそれを確める手がかりはない。

その後は南宋樓藏書志卷六二に「唐逸史三卷」と著録されるが、これは現行諸本の節で述べるように清の周世敬の輯本であつて、すでに伝承のテキストではない。

『太平広記』採録の『逸史』は重複を除いて七十五篇であるから、これは「序」にいう四十五篇と比べて三十篇も多い。そして『広記』が『逸史』のすべてを採録したとは限らないから、『広記』が拠った『逸史』はさらに多くを収載していた可能性がある。現に76「任生」や77「玄宗」などはおそらく採録から漏れた篇だろう。『広記』の出処の表示にはかなり問題があって、杜撰だと言われているけれども、同名の書ででもない限り、一部の書の五分の三もの部分が誤まられたとはとても考えられない。これはやはり『広記』採録本の『逸史』が八十前後の篇数を収録するテキストであったと考える方が確かであろう。

それでは原本『逸史』の四十五篇が少なくとも七十五篇に増えたことはどう考えればよいのか。ふつう書物は、殊に小説などはたいいのものが、書誌の著録に現われた『逸史』が三巻から一巻になり、やがて史書の上から消えていったごとく、時間の経過とともに少なくなっていく、価値の低いものは最後には淘汰されてしまうというのが定則である。附会ということは当然ありうるが、単なる誤解から附会されるのではないかぎり、それは附会される方の書物が相当の価値を認められているばあいであり、その附会の程度も自ずから限られていて、全書の五分の三もの分量が附会で増えるなどということはありえない。しかもそのばあい、同時代の他の書にいくらかの痕跡を残しているのが普通であろうのに、『逸史』のばあいにはそれが一つもない。『逸史』はすでに見たように、書物自体の価値は歴史の方から見ても小説の方から見てもそれほど大きなものではない。したがってそもそも故意の附会には値しない。また偽作ということも考えられるが、これまた仮託するものがやはり相当の価値ある人物か、ないしは書物か、あるいは相当の経済的効果が期待されるのでなければ無意味である。『逸史』はそのいずれにも当らない。

わたしの推測では、これは「序」にいう『史録』が『逸史』に混淆した結果、『逸史』の分量が増えたのではないかということである。この推測には確かな物証はないけれども、いくらかの蓋然性はあると思う。

「序」には「盧子既に史録を作り畢りて、乃ち聞見の異なる者を集めて、目して逸史と為す。其の間、神仙交化、幽明感通、前定升沈、先見過福、皆な其の実を摭りて、其の欠を補うのみ」とあり、『新唐志』に「盧子史録巻亡、又逸史三卷大中時人」とあるのが、『史録』に関する情報のすべてである。「序」の記述を一部だけとり出せば『史録』は「聞見の異なる者」を除外した書と考えられるかもしれぬが、当時の歴史意識が一般的には異界の存在を肯定していたものであり、まして『逸史』の著者には積極的にその存在を主張する傾向が認められる以上、劉知幾『史通』の指弾にもかかわらず、『盧子史録』が「神仙交化、幽冥感通、前定升沈、先見禍福」をきれいさっぱり排除して成立しているとは考えられない。さらに「其の欠を補う」という表現を『史録』を補ったと読めば、むしろ『史録』は『逸史』の世界と地続きの場所にあった可能性が高い。二つの書が同じ地盤の上に立っていたとするならば、文章作品としての質的な差異はそれほど大きな意味はもたなくなる。ここではむしろ当時の一般的な史書概念、史書のモデルが二書の内容を区別する上で重要な働きをするだろう。個人々人を語る史書のモデルは正史の列伝である。そこではまず重要人物、社会的に重要な役割を果たした人物が採りあげられる。したがって列伝の人物には当然エリート官僚や有名人が多い。いま刺史クラス以上が残るといふ節に、現行『逸史』約八十篇をかけてみるとどうなるか。

2・7・10・11・15・17・18・22・39・40・44・45・46・48・53・54・59・63・64・67・70・71・75・78・81

まず以上の二十五篇がすくいとられる。それに本紀やその他の有名人、また前項の近親者を加えると、77・79・3・12・61・8の六篇。他に14・19・21・60・65等も予備候補になるだろう。こうして列伝モデルで篩分けられた三十篇な

いし三十五、六篇ほどが、より正統的な『史録』に当たろう。そして残った四十五ないし五十篇ほどがその名も正しく『逸史』と附けられた、それほど有名でも重要でもない人々の異聞に当たるだろう。そしてその篇数は「序」に「四十五條」にきわめて近い。ほとんど同質の文章群が、列伝モデルによって類別され、それぞれ『史録』と『逸史』に別個に収められるものとなった。むしろ実際の著作の過程はこれとはまったく逆なのであるが。そしてさらに「序」の書きかたから見て、『史録』と『逸史』とは、前者により大きな価値は置かれながらも、なお正篇と補篇とのごとき関係にあり、書物自体も別行したのではなく、セットとして通行したのではないか。おそらく同質の文章でしかも組みで通行したことが、両者の間の混淆を速めたるう。やがて両者の区別がつかなくなり、『史録』などという訣の分らぬ名をかぶせるよりも、著者自身はその附録のつもりで書いたのだが、まだしも内容に合ったと後人が考えた『逸史』の方に吸集されてしまったらうというのが、わたしの推測である。そうなれば現存する『逸史』は原本のほとんどを保存しており、『史録』も残る文章からみて、「皆な我が唐の事」なりということになる。

また『新唐志』は確かに『盧子史録』を著録するが、これにしたところでどうも『逸史』の序文によって記されたものごとく、実際には『史録』という形の書を見ていなかったのではないかと疑われる。その注に「卷亡」とあるのは、『史録』という書物が唐代には存在したが、『新唐志』成立までのどこかの時点で全巻滅んでしまったというのか、またはいくらかは『新唐志』の時期まで残存していたのだが、書物全体の巻数が不明であるという意味なのか、どちらとも定めがたいけれども、「序」の記述と『新唐志』の記述とがあまりに符合しているのでそう疑われるのである。さらに想像を逞しくすれば、当時通行の『逸史』三巻が、その「序」にいう「四十五條」をはるかに超える篇目を持っており、しかも「序」に『史録』の記述があるために、『新唐志』の撰者は、わたしと同様四十五條をはみでる部分を『史

録』と考え、現物の分らなくなった『史録』について「卷亡」と著録したのかもしれない。なお、前項であげた『玉海』の著録は『新唐志』の引きうつしであり、王応麟その人が『史録』そのものを目観のうえそう記したとは考えられない。

四、『逸史』と雲笈七籤本『神仙感遇伝』

『広記』に『逸史』として引かれるもののうち全部で十三篇が、宋の張君房の編纂する『雲笈七籤』巻百十二・百十三兩卷の『神仙感遇伝』にまとめて収載されている。『神仙感遇伝』という書物はもとと来歴が不明でよく分らないところがある。宋代の書目類には見られず、『宋志』にはじめて著録される。子部道家類に杜光庭の他の著書とともに「神仙感遇伝十卷」とある。杜光庭撰ということからして怪しいのだが、『広記』にも引かれ、『雲笈七籤』にも収められているのだから、撰者が誰であれ、そういう名の書が宋初にあったことは事実である。むろん先後をいえば『逸史』の方が『神仙感遇伝』より先としてよいであろう。現行する道藏本は五巻しかなく、しかも最後に脱文があつて尻切れとんぼで終っている。そこには全部で七十五篇が数えられる。一方『雲笈七籤』本は計四十四篇を収める節本である。

『雲笈七籤』も成立時は百二十巻とされるのに、現行本は百二十二巻で、かなり書誌学上の問題を含むと思われるが詳しいことはよく分らない。『神仙感遇伝』を収載するのはその百十二巻と百十三巻上である。百十三巻は上下に分かれて、下には『続仙伝』が来るのだが、一巻が上下に分かれるのはここだけで、しかも同じ書場が一・二巻に三十篇と一・三巻上に十四篇という中途半端な分けかたをされているので書物の編成上ずいぶん奇異な感じを与える。そのためか

四庫全書本は『神仙感遇伝』上下巻を百十二巻の中にまとめてしまっている。いま残存する『神仙感遇伝』は以上、道蔵と雲笈七籤の二本の他に、まだ類書や地方志に散在するもの、およびまとまっては『広記』に引かれた二十七篇がある。さて、ここで問題としたいのは『逸史』から十三篇をとりこんだと考えられる『神仙感遇伝』と『逸史』とはどういふ関係にあるのかということである。上記『感遇伝』三本と『逸史』十三篇との対応を表にすると左のようになる。

神 仙 感 遇 伝		逸 史
雲笈七籤	道 蔵	広 記
30(一一二巻)	75	8
14(一一三上巻)		1
		18
		13

『七籤』巻一一二の三十篇は道蔵五巻本ときれいに対応し、排列まで一致する。ところが後半『七籤』の巻一一三上の十四篇には道蔵に対応する部分がない。これはいちおう『七籤』の底本がもと十巻本であり、道蔵のは六巻以下が失なわれたのだとして、その失なわれた部分に対応するのだと考えてみる。そして『七籤』よりやや早い『広記』所引を見てもみると、『七籤』巻一一二、道蔵に対応するのが八篇、『七籤』巻一一三上所収と同じものがたった一篇、残りの十八篇は『七籤』、道蔵二本のどこにも収載されない文章である。とすれば『広記』所引の十九篇と『七籤』収録の十四篇、合せて三十二篇が、失なわれた巻六から巻十に対応するものか。数だけから考えれば十分成立つ説明である。

しかし奇妙なことには、『逸史』の十三篇が『七籤』巻一一三上の十四篇と内容がほとんど一致するのである。十三

が十四と一致するというのは、『七籤』の二篇が『広記』所引『逸史』では一篇にまとめられているからである。一一の修飾の字句や人名の整理に少しちがいは見られるものの、基本的には同じものである。一部の書物の半分がすべて他の書物から割裂してきたものというのには、ありえないことではないがいかにも不自然である。また、仮りに原本『神仙感遇伝』が十卷あったとして、道藏本五卷所収の篇数に比例させて卷六一卷十の収録篇数を七十五篇とする。そこからそれぞれ別個に引用した『広記』の十九篇と『七籤』の十四篇が一篇しか重ならず、『七籤』のが全部『逸史』の文に一致するというのは、やはりどう考えてもあまりに不自然である。しかも『広記』と重なるかに見える一篇ですら『広記』の出典には「仙伝拾遺、神仙感遇伝、逸史等」とあって、いくつかの話から合成されてきているので正確に一致するとは限らないのである。

これはどう解すればよいのか。鍵は『雲笈七籤』卷一一三上の扱いにかかっていると思われる。これを最初の仮定のように失われた『感遇伝』卷六く卷十からの採録とは考えず、『広記』所引の十九篇のみを失われた卷六以下からのものと考えるのである。そして『雲笈七籤』流伝の過程で、何かの事情で後人によって『逸史』ないし『史録』からの十四篇がまとめてここに附加された。さらに挿入者の故意か偶然かで『逸史』というもとの書名が脱落した。そう考えた方が理にかなない、また『七籤』卷一一二・卷一一三上に涉る編成上の疑問も解けるように思う。したがって『広記』が底本とした『感遇伝』の方がより元の形に近い本であり、『七籤』採録本はすでに道藏の底本と同様、不完全な五巻本であったということにもなる。また『逸史』について言えば、『七籤』に附加された『逸史』十四篇は『広記』所収のものではなく単行のテキストのものであったこと。なぜならば『七籤』が最初に引く「任生」（輯校76）一篇は『広記』が引かないものであるから。そして3「羅公遠」（つまり『広記』と『七籤』一一三上とが重なる一篇）は『広記』の

編者が『仙伝拾遺』『神仙感遇伝』および『逸史』をもとに書き直したものであって、『雲笈七籤』本は挿入者の手が入っていることは当然考えられるもの、形としては「羅公遠」「羅方遠」という二人の人物の話として出る方が、むしろよく『逸史』の原型を伝えているのではないか、というようなことが考えられる。そうなればまた、『逸史』と『神仙感遇伝』との関係はほとんどないことになり、『雲笈七籤』との関りも解決できない部分は残るにしろ、よほどすっきりしたものになる。

* 雲笈七籤本の方が『広記』所引に比べてはるかに読みやすく、文章そのものに編纂者の整理が行きわたっている感じがする。

五、現行諸本

『雲笈七籤』に含まれるような例を除いて、現存する『逸史』のテキストには次のものがある。『太平広記』本、『類説』本、『紺珠集』本、明抄『説郛』本、静嘉堂本、『旧小説』本の六本である。

『太平広記』本 重出を含めて七十七篇、削ると七十五篇を採録して、『逸史』の主要部分を覆っていると考えられる。これが原本『逸史』でないことについてはすでに述べたが、補うとすれば、『広記』の編纂態度からみて、一篇ごとにあったかもしれない著者の評語や序跋に類するものが删られているであろうこと、また文章自体にも編纂者の手による増改删節が加えられているだろうこと、さらに文中、「唐」の某ないし「唐〇〇中」に見られるごとく明らかな附加があるということ等である。これらはなにも『逸史』に限ったことではなく、通じて『広記』を読む際には承知しておかねばならぬことである。『広記』各本のちがいについては輯校盧子『逸史』の校記に記したが、それほど大き

な変動はない。

いまここで取上げようとするのは『広記』本そのものではなくてむしろ『広記』が依拠した『逸史』採録本ともいべきテキストのことである。原本『逸史』が四十五条を取めたものであったことは「序」にあるが、それ以上のことは不明、何巻の構成であったかさえ分らない。唐末、五代を経て宋初に『広記』が編纂された時には七十五篇以上を含むものになっていた。その六十年後の『崇文總目』に「逸史三卷」と著録されているところから考えれば、『広記』採録本も三巻本であった可能性が大きい。

ところで『広記』所引の『逸史』には同じ話が重出するものが二篇ある。2 李林甫と54 袁滋。前者は一部分が、後者は全体が重引される。いま前者の重なる部分を挙げ、加えて曾慥『類說』（紹興六・西紀二三年）の引く同じ話をも列挙する。

『廣記』卷一九、李林甫

先是安祿山常養道術士。每語之曰、我對天子、亦不恐懼、唯見李相公、若無地自容。何也。術士曰、公有陰兵五百、皆有銅頭鐵額、常在左右。何以如此。某安得見之。祿山乃奏請宰相宴於己宅、密遣術士於簾間窺伺。退曰、奇也。某初見李相公、有一青

『廣記』卷七六、安祿山術士

唐安祿山多置道術人、謂術士曰、我對天子亦無恐懼、唯見李相則神機悚戰。卽李林甫。術士曰、公有陰兵五百人、皆銅頭鐵額、常在左右。何得畏李相公。又謂祿山曰、吾安得見之。祿山因表請宴宰相、令術士於簾下窺之。驚曰、吾初見報相公來、有雙鬢

『類說』卷二七、二青衣捧香爐

安祿山謂術士曰、我對天子亦不恐懼、唯見李相公則悚懷。術士曰、公有陰兵數百人、銅頭鐵額、常在左右、何畏李公乎。祿山因宴宰相、令術士窺之。驚曰、吾初見報相公來、有雙鬢二青衣、捧香爐先入。僕射侍衛銅頭鐵額數百、穿屋踰垣而走。某不知其故、

衣童子、捧香爐而入。僕射侍衛銅頭

鐵額之類、皆穿屋踰墻、奔逆而走。

某亦不知其故也。當是仙官暫謫在人

間耳。

二青衣、捧香爐先入。僕射侍衛銅頭

鐵額之類、皆穿屋踰垣而走、某亦不

知其故、當是仙官暫謫居人間也。

當是仙官謫在人間耳。

語られることがらと同じであつて、しかも上二段は同じく『広記』の引用でありながら、その表現がかなりちがう。もともと中国の類書の編集においては、原資料をそのままの形で正確に引く場合もなくはないが、おおむねは編纂者の判断によつて適宜節略して引かれる。殊にもとの資料が長文に渉るばあいなどそうである。そして大部の類書のばあいは、編集者も部門によつてちがつただらうし、そういうときは同じ原資料からの引用でも、編集者によつてその引用のしかたも具体的には当然ちがつてくる。まして瑣事佚聞等を集めた小説の類書といふべき『広記』は『太平御覽』などと比べれば、かなりルーズな編集をされたといふ。しかしそれは出典が往々にして誤つてゐるといふような所に於てであつて、ことさらについでに引用そのものは、他の類書に比べても、その節略削除はそれほど大量のものではない。むしろ往々にして体をなさないような引用のしかたをする類書の多い中であつて、『広記』はまだしもよく原形を保存している方である。

それらのことを考慮した上で、重出の文章を見てみると、同じことさらについでにほぼ同等の分量を引用しているのに二つの文章は表現がちがいきる。それも一つ一つの語句がちがうのであつて、同一の資料から異なる人間がそれぞれに要約した結果、文章表現が異つてしまつたというようなちがいはない。たとえば「一青衣童子」が「雙鬢二青衣」になるなどということとは、分身の術や性轉換の術を心得ぬかぎり、どれほど引用が杜撰であつても同一の資料に拠つてい

る場合にはありえないだろう。じっさい『広記』の諸本間の校勘などバカらしくなってしまう。同じことは54袁滋についても言いうる。(輯校盧子『逸史』参照)このことから『広記』全体に渉る編集のしかたはさておき、『逸史』に限ったばあい、『広記』採録本には二種以上の異なるテキストがあったと考えてよい。考えてみればあたり前のことだが、このような長大な書物の編集に使われた原資料が一本しかなかったというほうが稀であって、しかもそれらはほとんどすべてが抄本であってみれば、同じ書物にもかなりの異本の存在が首肯できるのである。

『類説』本 曾慥撰、南宋紹興六年序刊。凡六十卷。その卷二七に、節略であるが凡そ二十篇、『広記』と重複しない篇として76以下五篇を含む。前節で重出の2の例文を挙げたが、『類説』はこの篇をも引く、それらを対照してみると『類説』は、『広記』卷七六に引く系統の『逸史』に拠ったことが分る。さらに、これは『類説』に直接かわらぬいが、『広記』卷七六の文中に「即李林甫」とあるのは、この「安祿山術士」一文がもと卷二二の「李林甫」のような長い文章から摘録されたがために附けられた『広記』編纂者による注文であって、後に本文に混淆したことが分る。そしてそのことによって、『類説』の引用は『逸史』の文を割裂して摘記したのもあることが推量できる。ここで用いたテキストは明天啓刊本影印本(一九五五年文学古籍刊行社版)である。他に四庫全書本がある。さらに最近、台湾から明嘉慶抄本に拠る校訂本が出たということだが未見。

『紺珠集』本 無名氏撰、南宋紹興七年王宗哲序刊。凡十三卷。来歴のよくわからない書だが、その卷十に「唐逸史 盧子」として八篇を載せる。そのうち二篇は『広記』と重複しない。ここでは明刊影印本(民国五九年台湾商務印書館版)を用いた。他に四庫全書本がある。

明抄『説郛』本 陶宗儀撰。凡百卷。その卷二四に「序」も含めて六篇を載せる。『逸史』序はこの書によって伝え

唐盧氏逸史載裴晉公度與郭中庚咸同生於甲辰裴嘗戲
曰郭中乃唯甲辰也 蘇春史軒筆徑卷五

周昌公主亮帝傷悼不已以仙音賜各國寺冀進其
福其狀殊高厚露寶為之花鳥皆玲瓏燭然然外
玲瓏者皆響動于常清遠燭盡響絕莫測其理
探唐逸史一則

唐逸史卷上

唐袁州盧肇子發洪

昔有盧李二生隱居太白山讀書東習吐納道引之術
一旦李生告歸曰果不能甘此寒苦且浪跡江湖欲
別而去後李生知樞子園人史隱欺欠打官錢數萬
貫焉廉不得東歸曾甚偶遇揚州阿使橋逢一人草
蹠布衫視之乃盧生王昔號二勇李生與語衷其粗
絰盧生大罵曰我曾賤何畏公不忤好衣身凡弊之
所又有欠員且被囚拘尚有面目以相見乎李生厚
謝二勇笑曰居處不遠明日即將來迎豈果有一

静嘉堂藏本書影

られた。標題に「逸史三卷」とある。「三卷」という注を信用するならば、ごく一部ではあるが、元末明初まで伝えられた三卷本『逸史』の風格をよく保存していると言えよう。節略引用もあるが、『広記』と照し合せて比較的正確な引用と思われる。『広記』とは「序」と「玄宗夢喫藤花」が重複しない。涵芬樓排印本を使用。

静嘉堂本 『唐逸史』三卷、即ち南宋樓旧藏抄本である。陸心源の韻宋樓が『逸史』の旧抄本を蔵していたことは、その蔵書志『韻宋樓蔵書志』卷六十二子部小説家類に「唐逸史三卷旧抄本」と著録のあることからも分る。そしてその書が後に日本に將來され、静嘉堂文庫の蔵するところとなったことも、当文庫の蔵書目を繙けば明らかである。

この書は縦二九・四センチ、横一八・二、框高一八・五、框幅一四・二。一面十行、行二十一字の精写本である。表紙には「唐逸史 三卷 袁州盧肇子

発誤 計七十九葉」と墨書してある。構成は、周世敬の序、目録、本文三卷、附録という次第で、附録には葉夢得『避暑録話』の一則、及び篇目考が附いている。序文の上部余白には「歸安陸封聲藏書之記」という方形朱文の印が押してある。なお目録裏には、周氏の手になる附箋が二枚あって、以後の説書で拾った『逸史』佚文二条を記している。周氏序と篇目考および附箋二枚、それに本文中の朱校は手跡から見て、『甯宋樓藏書志』の言うように周氏の手書と思われる。本文および附録の『避暑録話』一則の清写は別人の手になる。

この書は確かに天下の孤本にはちがいないし、立派な精写本でもあるし、各条の末にすべて出処を明記しないから、一見して輯本であるとは分らず、あたかも伝承単行のテキストのように見える。しかし実は清も嘉慶期における『太平広記』からの輯本であって、明抄『說郛』の採録本はおろか、明代伝承本の面影をしのぶには由ない。上中下三卷に分けてあるのは宋代書誌の旧によったのであろうが、排列の順序もそのまま『広記』に拠っている。周世敬の序には、清写の後校正一過したとあるが、その朱筆も『広記』に拠ることを証する。また依拠した『広記』は明許自昌刊本と符号する所が多い。たとえば25「呉清妻」輯校校注「三」の「一女冠」は抄本もと「一」字を脱し、朱校でこれを補うが、許自昌刻本も「一字」を脱する。また3「宋師儒」同校注「五」、許刻本、抄本ともに「所」字の下に双行注があつて「有脱文」と云うが、他本はこの注文がないなど。しかしまた合わない所もある。たとえば2「李林甫」同校注「一〇」、「日」字の上に許刻本は「道士」の二字があるが、抄本は他の『広記』諸本と同じくこの二字がない。したがって抄本が最初『広記』のどのようなテキストに拠ったのかはにわかに決め難い。

静嘉堂本三卷は、それぞれ一七、二八、三二篇と計七十七篇を抄録する。それと附箋の二篇と合せると計七十九篇を輯めたことになる。その内、『広記』からは七十四篇、下巻卷末の三篇はこの書の例によって出処を記さないが『広記』

以外の書であることははっきりしている。附箋の二篇は宋の魏泰の『東軒筆録』と元の方回の『虚谷間抄』と出処を明記する。しかしこれらがすべて『逸史』の佚文であるかということになるとすこぶる問題がある。重出、引違い、附会等と、『広記』による七十四篇以外はすべて疑わしい。これについては「輯校」の附録一佚文の項を参照。

そのようなわけで、この書は周世敬が『広記』を主要なソースとして輯めたもので、それ以前の『逸史』の形態を示すものではない。もっともこの書はその文中に附けられた雙行注に見られるように『広記』の他の刊本また『広記』以外の書にも当ってそれなりの努力はしていることは認められ、近世に於ける最初の輯本たるに恥じないものである。

『旧小説』本 呉曾祺編、一九一〇年商務印書館排印本、一九八五年上海書店影印本。四十一篇をすべて『広記』より転録している。

六、著者

『逸史』の著者はその「序」に「盧子」と自称するだけで名を記さないから、どういふ人物か分らない。各書目もすでに挙げたように、「序」の日附けに拠って「大中時人」というだけで、それ以上著者について言及しない。この大中の盧子をはじめて盧肇と結びつけたのは『詩話総龜』である。その前集卷四十七神仙門には二条の『逸史』佚文76・1を引き、その出処とともに「盧肇遺史」とする。阮閱の『詩話総龜』は北宋宣和五年（二三）に稿成り、南渡後の紹興年間に上梓されたという。「遺史」と「逸史」は音が近く、引用文は他書に『逸史』として引かれるものと同じだから、『逸史』佚文として誤りはない。ただ「盧肇遺史」とするのみでその根拠を言うものはないから、どうして盧肇と

したのかという理由は不明である。次に虚肇と『逸史』を結んだのは『文標集』外録に引く『十代文献略』および静嘉堂本周世敬の序跋がいう、葉夢得の『避暑録話』である。その巻上には

白楽天の文集には、李浙東から伝えてきた話、海上に神仙の館があって白楽天が来るのを待っているというのを載せ、詩を作っている。「吾は空門を学びて仙を学ぶにはあらず、恐らくは君が此の説は是れ虚伝ならん。海山は是れ吾が帰処にあらず、帰らんには則ち須らく堯率天に帰るべし」と。さきごろ虚肇の『逸史』を読んだところ、この事について比較的詳しく述べられていた。李浙東とは李君稷である。会昌の初年浙東觀察使となった。海上往來の商人が大風に遭い海上の大きな山に漂着し、その楼殿の額を見ると蓬萊とあった。そばに一院があって嚴重な戸締りがしてあった。花木が庭いっぱい植わり、中には机が置かれていた。ある人が、これは白楽天院なのだが、かれは中国にいてまだやってこないのだと言った、というものである。唐代の小説にはでたらめが多いのだが、これは白楽天の詩に見える以上、まちがってはいないのだろう。

と書いている。李浙東の話とは『逸史』の18「白楽天」を指すものだが、葉の文章の眼目が話のなかみの実か否かというところにおいて、当然のことながら虚肇と『逸史』そのものとの関係については触れられてはいない。『避暑録話』は南渡後の紹興五年（二二五）に成ったから、南渡を前後して二人の知識人が『逸史』は虚肇の著作だと考えていたわけである。さらに編者の分らない類書『錦繡万花谷』前集卷十八に1「虚李二生」を略引するが、その出処を「虚肇遺史」とする。だが『錦繡万花谷』には他に「逸史」と記すものもある。他の類書からの孫引きということも考えられる。特に「虚肇遺史」とする一条は字句を比較対照すると『詩話総龜』を略引した可能性が強い。阮閱等以前ないし同時代の書目がいずれも『逸史』著者の姓名を伝えないのに、かれらが「虚子」を「虚肇」としたのはなぜか。『逸史』

を盧肇の作とするテキストをかれらは持っていたか見るかしたのか、それともそういう伝承を聞いていたのか、あるいはかれら自身の判断で『逸史』と盧肇とを結んだのか、それはどちらとも分らない。最も常識的には「盧肇遺史」とするテキストがあって、それに拠ったのだと考えられよう。だが仮りにその名のテキストがあったとしても、決してそれほど早い時期のものではないと思われる。『詩話総龜』以前に『唐宋遺史』という略して言えば『逸史』と紛らわしい書が出ている。これはいままではすでに佚書で、類書に散見するのみの書である、『詩話総龜』の引用書目に「西安詹介唐宋遺史」（四部叢刊本、詹を虞に作る）とある。「詹介」は『宋志』その他では「詹玠」に作る。この人物についてはよく分らない。ところでよく似た書名の書でも別個に通行しているときはさほど問題にならないが、それが他の書物、殊に類書等に引用されるばあいにはたちまち問題が起きる。そういうばあいは往々にして書名を省略して引かれるから混同しやすい。それを防ぐためには両者を区別しなければならぬ。そこで書名の上に著者名を附けるといふやりかたが生れる。『詩話総龜』に「盧肇遺史」とし、『分門古今類事』に「詹玠遺史」などとするのがそれである。「盧子」が「盧肇」になったのはどういふ理由でか分らないが、『逸史』に「盧肇」の名が冠せられたのは、わたしの推測ではたぶんそのときだろう。

宋の南渡の前後に、盧肇に関する資料がどれほど残っていたのかは分らない。だが今に残されたものから見て盧肇と『逸史』の間にある程度の関係はつけられないわけではない。唐の大中元年（八四七）を中心としてその前後にそれ相当の名があり、文筆もたち官界でも活躍した「盧氏」を捜せば、まずは盧商、盧簡、盧鈞、盧肇、盧渥といったところだが、盧肇を除く他の人物は、かれらが作った詩文さえ殆ど残っておらず判断のしようがない。それに比して盧肇の方はいくらかは参考のための資料が残っている。かれには同郷の後人童宗説（または童説）がさきの『詩話総龜』や『避暑録話』

に少し遅れて紹興三十(二六〇)年に編んだ『文標集』三巻が伝えられている。そこに「閩城君廟の碑記」という文章がある。それは一種の龍の恩返し説話を記したのだが、「廟記」であるし、実際は盧肇の才能を認めてくれた宜春令盧夢の業績賛美の文章であるため、『逸史』の文とはかなり趣きを異にしている、理屈ほく固いところがある。しかし怪異の記述にはなかなか精彩があつて、著者が志怪の世界にも相当のたしなみというか関心のあつたことを伺わせる。また盧肇より少し後の范攄の『雲溪友議』は次のような話を伝えている。

著作郎の盧肇がまだ華州の乾干公泉の防禦判官だつたころ、仙掌の山々に遊んで馬を巨靈府に休めた。そこでとろとろとまどろんだかと思ふと夢を見た。数間のがらんとした屋舎に老婆が一人、大釜の火をたいている。盧君がそのわけをたずねると、わたしは華山の神の母だという。又た釜で何を煮ているのかというと椽の実だという。それをどうするかときくと、老婆は悲しそうに、食べるのじゃという。盧君が、息子は五常の神々の主で、お供物はうんざりするほどあるのに、おふくろ様が木の実を食っているというのは親孝行の気がないのですかねという、鬼神の世界では君臣父子であっても、禍福はもともと関係がないのじゃ、祭られる場所で名前を呼んでもらえぬ者はお供えにはあずかれんのじゃよ、という答えである。盧は夢から覚めると、廟の巫を呼んで、別に神母の位牌を作つて安置させ、食事のたびに一人前供えさせるようにした。公宴で欠けたり、家に居て忘れたりすると、喉がむせて体が不快になつた。雲溪子が范陽(盧鈞ととりちがえたか)からじかに聞いたので書いておく。(巻三)

この話は『逸史』の67「裴度」の説話に少し似ているが、その真偽はともかく盧肇が異界あるいは民俗の世界に親和していたことをおわせる挿話である。そしてこれらはいずれも『逸史』の世界、更にはその著者の精神世界へも通底するものである。このあたりがあるいは阮閱や葉夢得等が盧子を盧肇に比した理由ではないか。もつとも盧肇に関する

資料のうち強いて『逸史』と関連づけられそうなのはこれぐらいで、その他には『逸史』や『史録』の著作をいうものも、それを示唆するようなものも何一つない。『文標集』の編者、ほとんど葉夢得や阮閱の同時代者である童宗説すら、その序で一言も『逸史』には言及しない。またごく一般的にいつて、唐代でも伝奇が最も成功を収めた中唐以後という時代であってみれば、この時代の知識人には誰にしろ多かれ少なかれ奇異なもの——それがかりに六朝志怪の奇異さとはちがっていても——への傾倒や傾向があった。そのことを考えるならば、もともとこんなことがらは著者を比定するための理由としては成り立たなくなる。

もう一つ、「逸史論」でも述べたが、『逸史』の著者は仏教に関心を持たなかったらしいということがある。盧肇はどうか。残された作品に見るかぎり、仏教的色彩はそれほど見られない。詩では「甘露寺に題す」「祝融寺の蘭若に登る」「清遠峽観音院に題する二首」等といったものが寺院に関するものだが、詩中に仏教そのものへの傾斜はない。むしろ神仙・道教に関する用語でもって寺院を詠んでいる。『全唐文』巻七六八には「宣州新興寺碑銘并序」を採録する。これはわざわざ新興寺のために書かれたものであり、序文中には仏教の教理に言及する部分もある。しかしこれが書かれたのは盧肇が歙州刺史となった咸通三年（八三三）以降であって、『逸史』が成った大中元年（八五七）からは二十年ちかく後であること、またこの碑銘そのものが新興寺の再建をしとげた裴休——盧肇は裴休に請われて大中元年前後一時その幕客となったことがある——の功績をたたえるものであること等を考えるならば、この文章は『逸史』の仏教色のなさには抵触することはないだろう。そうならば、残された作品からみた盧肇は『逸史』の著者たる資格は持っているように見える。しかしこれもまた状況証拠の一たるは失わないが、『逸史』の著者までもって行く決定的な証拠とはなさない。

ともかく盧子||盧肇説の可能性は否定できないもの、大中元(八四七)年からすでに三百年に近い時の経過の後に出て来た説であつてみれば、そのままに信用するわけにはいかない。いまのところこれは阮閲や葉夢得がそう信じたという事としておくだけの方が歴史に忠実というものであらう。

ただ著者もし盧肇ということになれば、すでに述べたようにかこれに關することはある程度まで分る。前述の『文標集』三卷、それに『全唐詩』『全唐文』には詩文が、そして『唐撫言』『玉泉子』『北夢瑣言』『唐語林』『唐詩紀事』などには關連資料が残っている。そして『文標集』に外録として附けられた部分には李厚岡(「丁氏善本室藏書志」は李原岡に作る。いま静嘉堂藏本による)によつて相当たんねんにそうした資料が集められていた、そう便利である。記事の中に「康熙丁未(二六七)」のものがあるから、おそらく清も前期に編まれたものだらう。残念ながら『豫章叢書』に複刻された『文標集』には収められていないが、静嘉堂藏の旧抄本『文標集』(これも甬宋樓旧藏の一本)に見られる。また丁氏善本室旧藏本にもこの外録一卷が附されているという。(「丁氏善本室藏書志」卷二五。)

なお、現在の中国での説は程毅中氏以下、葉夢得『避暑錄話』に拠つて盧肇の作とする。「輯校」附録の参考文獻目錄參照。

一九九〇・一〇・三一。